

# 開封ユダヤ人社会の滅亡

丸山直起

## はじめに

中国のユダヤ人が、その厚いヴェールを剥いで、忽然と姿を現すのは17世紀のことである。突然のユダヤ人の出現は、西洋のキリスト教会にも、ユダヤ世界にも少なからぬ衝撃を与えることになった。しかしながら、こうしてその存在が確認された中国のユダヤ人社会も、外界から隔絶された状態のなかでは衰退への道を実に辿ることになり、最終的に中国社会に飲み込まれる形で歴史の深層部に埋没してしまい、跡形もなく消えてしまうのである。

この小論は、中国の古都、開封に存在したユダヤ人社会の歴史の記述を通してその独特の状況に焦点をあてるものである。

## I. 北京を訪れた老人

中国最大の都市上海の北西に、河南省の古都開封(カイフォン Kaifeng)がある。西安、洛陽と並んで中国3大古都とも称されている。北京、上海

を直線で結んで二等辺三角形を描くと、開封はちょうど三角形の頂点に位置する。黄河がすぐ近くを流れており、古くから交通の要路であったが、洪水にたびたび見舞われることがあった。

中国のユダヤ人社会を述べるには、まずこの開封から始めなければならぬまい。この開封に中国最古のユダヤ人社会が存在したからである。

イスラエルのテルアビブ大学キャンパスの一角には、1978年5月にベイト・ハテフォツォート（ユダヤ・ディアスポラ博物館）が設立され、世界各地のシナゴグ（ユダヤ教の会堂）の模型が展示されているが、そのなかでひとときわ目につくのが開封のシナゴグである。中国の寺院風造りの建物は博物館を訪れる人々に遠く東アジアにもユダヤ人の足跡が印されたことを明白に語りかけている。

中国にユダヤ人社会が存在することが初めて明らかになったのは17世紀のことである。1605年6月、年齢60歳ぐらいの1人の老人が北京を訪れ、イタリア生まれのイエズス会士マッテオ・リッチ（Matteo Ricci）に面会を求めた。面会に応じたリッチにこの老人は驚くべき情報をもたらしたのである。

老人の名前はアイ・ティエン（Ai T'ien）といい、ユダヤ教徒であり、はるばる河南省の開封から750キロメートルを旅してきたのであった。北京で仕官のポストを求めるため、というのは表向きの理由で、老人にはもうひとつ別の理由があった<sup>2)</sup>。アイ・ティエンが過ごしてきたそれまでの人生のなかで、マッテオ・リッチは初めて出会う外国人であったに違いない。アイ・ティエンは書物などから、17世紀初め、北京には西洋から白い肌の蛮人たちが一神教の宗教を広めるため訪れており、しかも彼らは中国の西域や開封に見られるようなイスラーム教徒とは異なることを知っていた。ひょっとして彼らはイスラエルの民ではないだろうか。もしそうだとすれば、リッチはユダヤ教のラビ（律法士）に違いあるまい。アイ・ティエンがわざわざ遠路を旅して北京を訪れたひとつの理由も、リッチに会見し、

衰退しつつある開封ユダヤ人社会の実情を知ってもらい、何とか救済の手を差し伸べてもらえないか、と訴えることであっただろう。後にリッチがローマへ送った報告によれば、この老人はキリスト教の存在を全く知らなかったというから、老人がリッチはラビではないかと期待したのも無理はない。

平川祐弘氏の『マッテオ・リッチ伝 I』(平凡社東洋文庫)によれば、リッチは1578年3月にポルトガルのリスボンを出立、途中インドのゴアに4年余り滞在したのち、マカオに1582年8月に到着した。リッチが北京へ入京したのは、ようやく1598年になってからであり、いったんは南京に戻ったリッチが北京居住の許可を得て、北京に落ち着くのは1601年で、それまでにリッチの名は中国に知れ渡っていた。20年以上に及ぶ中国滞在の間、リッチは中国の奥地にはキリスト教徒が世間から隔離された生活を送っているとの噂話を耳にし、事実を確かめようと何回となくさまざまな試みを行っていたものの、何の手がかりも得られず、諦めていたところだったから、この老人の突然の出現に狂喜したことは言うまでもなかった。リッチは老人に教会内部を案内したあと、老人から身の上話を聞くことにした。リッチを仰天させたのは、この老人が、最初想像したような中国奥地からはるばる北京にやって来たキリスト教徒ではなく、ユダヤ教徒だったことである。容貌は中国人と全く変わらなかった。アイ・ティエンのほうもまた、初めてキリスト教と遭遇することになった。

リッチは、開封に数世紀にわたって存続したユダヤ人社会が存在すること、中国の他の地域にもかつてユダヤ人社会が存在したが、いまでは開封を残してすべて消滅してしまったこと、これらのユダヤ人は割礼を行い、豚肉を食べない、安息日(シャバト)を守るなどユダヤ教の習慣に従っていること、さらに開封のユダヤ人社会も衰退の一途をたどっており、ユダヤ人人口は1,000人程度となってしまうこと、開封のシナゴグには600年前に書かれたといわれるトーラー(モーセ五書)が納められてい

ることなどを知ったのである<sup>3)</sup>。キリスト教がこの地まで到達し、キリスト教徒の末裔が生存する可能性はなお捨てきれなかったし、中国での布教活動に情熱を燃やすマッテオ・リッチにとって、この事件は大ニュースであった。彼がこの件を早速バチカンに報告したことは言うまでもない。

1607年12月リッチは2人の中国人のキリスト教徒を開封に派遣した。果たして、開封にキリスト教徒のコミュニティが存在するのかどうか、ユダヤ人のコミュニティの現状などを調査させるためであった。キリスト教徒を発見する幸運には恵まれなかったが、2人はユダヤ教のラビと会見することに成功した。ラビは彼らに自分は高齢で、病弱だが、後継者がいないため、リッチが開封に移って、豚肉を食べないという条件でラビになってもらえないかと提案し、2人のキリスト教徒を啞然とさせた<sup>4)</sup>。

2年後、こんどはアイ・ティエンの甥を含む3人のユダヤ教徒が北京を訪れた。3人によれば、開封ユダヤ人社会のラビが最近死亡し、後を継いだその息子はラビの資格要件に欠けており、このままだと早晚、ユダヤ人社会は消滅してしまう恐れがあるというものであった。リッチは、もし開封のユダヤ人社会が周囲のイスラーム教徒のコミュニティに飲み込まれてしまうことになれば、イエズス会にとっても大変な損失であると危機感を強めた。そうならないうちに彼らを速やかにキリスト教徒に改宗させることが何よりも肝要であり、そのためには早急に開封にイエズス会の伝道所を開設することが必要であるとの結論に到達したのである。

## II. キリスト教会の対応

マッテオ・リッチが1605年ローマのイエズス会にあてて送った書簡によって、中国の奥地にユダヤ人の存在することが初めてヨーロッパに伝えられることになり、ヨーロッパのキリスト教社会にセンセーションを巻き起

こすことになった。リッチの報告に基づいてローマのイエズス会士らがたてた推論によれば、開封のユダヤ人はキリストのことについて何も知らなかったというが、それならば彼らはキリスト以前に中国へ渡ったユダヤ人の子孫なのだろうか。しかも外界からは全く隔離されていたというから、彼らのトーラーや、宗教上の慣行に西洋のユダヤ人社会とは異なる何かが存在するのではないか、等々西洋の中国ユダヤ人へのイマジネーションは否応なく高まり、ヨーロッパのキリスト教会は好奇心も加わって俄然色めきたった。当時ヨーロッパのキリスト教会はかたくなに自分たちの教義に固執するユダヤ教徒を教会の手で論破し、改宗させようと総力をあげて取り組んでいたから、キリスト教会は、その宣教活動によって、中国のユダヤ人をキリスト教に改宗させることがその戦略上重要な意味をもつものになることはもちろんのこと、同時に中国内陸部のユダヤ人の存在は、他の世界から途絶されていたとはいえ、神がこの辺境の地にも福音を授けられた証拠であるとして、聖職者の使命を果たす好機と受けとめたのである<sup>9)</sup>。

リッチはついに開封に足を踏み入れることなく1610年北京で客死するが、リッチ死後の1613年、マカオから北京に移ってきたイエズス会の宣教師ジュリオ・アレニ (Giulio Aleni) が、自ら開封に赴き、シナゴグを訪れている。1628年にはイエズス会の最初の伝道所が開封で設立された。シナゴグとは往来可能な距離にある。ところが、当時明朝末期の中国各地には飢饉の打撃を受けた農民などの暴動が相次ぎ、1642年に開封は李自成の率いる反乱軍によって包囲された。反乱軍は黄河の堤防を決壊させ、水攻めに出た。この水害は空前の被害をもたらした。開封の主要建物は水没し、多くの人々が死んだ。シナゴグも濁流に飲み込まれ、トーラーなど多くのユダヤ教教典も流されたが、幸いにして発見され、乾燥されたのち、ふたたび仮の礼拝所に納められた。イエズス会の伝道所も流出してしまい、神父の行方は知れず、溺死したものと考えられている。さらに18世紀に入ると、ローマから北京に対し開封のユダヤ人との接触をはかるよう求めた

指令が届いた。ゴザニ (Jean-Paul Gozani)、ドマンジュ (Jean Domenge)、ガウビル (Antoine Gaubil) らのイエズス会神父が開封を訪問し、やがて19世紀になるとプロテスタントの活動が目立つようになる<sup>6)</sup>。

このようにして開封のユダヤ人社会の様子が少しずつ外部に明るみにできるようになった。とくに1704年にゴザニ神父は開封のユダヤ人社会およびシナゴークの様子を細かく記した書状を残している<sup>7)</sup>。開封のシナゴークは西向きに建っており、方角は明らかにエルサレムを指している。また、1721年に開封のユダヤ人社会と交流を開始したドマンジュはシナゴークの外観や内部の模様を克明にスケッチしており、イスラエルのディアスポラ博物館に陳列されている開封シナゴークの模型はこれを下敷きにしている。

ユダヤ教は、中国ではユダヤ教徒が動物を屠る際に血抜きしやすくするために筋を切るところから、刀筋教 (Tao-chin-chiao) とも、挑筋教 (T'iao-chin-chiao) ともよばれた。かつては、杭州 (Hangchow)、寧波 (Ningpo)、北京、寧夏 (Ning-hsia) にも、ユダヤ人社会が存在したが、すべてイスラーム教に改宗するなどして消滅し、結局、開封だけが残った<sup>8)</sup>。これらの地域のユダヤ人口は極めて少数であり、そのうえ周囲のイスラーム社会とは区別されず、ほとんどムスリムと同じように見られていた。そのためムスリムへの改宗はごく自然であったと思われる。

1809年、ロンドンで「対ユダヤ人キリスト教普及ロンドン協会 (The London Society for Promoting Christianity among the Jews)」が創設された。同協会は、その名が示すようにユダヤ人のキリスト教への改宗を勧めるプロテスタントの団体であり、最初はロンドンの貧しいユダヤ人の中で熱心に活動していた。しかし、貧しいユダヤ人に、食物と衣服を与えるからキリスト教徒になれば、かなり強引に改宗を迫ったため、イギリスのユダヤ人社会からは抗議の声が上がったといわれる<sup>9)</sup>。

清国は1723年、キリスト教を厳しく禁じ、宣教師をマカオに追放した

が、このように中国で排外思想が高じた18世紀には、イエズス会の活動も低迷し、その結果ほぼ1世紀以上の間、開封のユダヤ人社会の動静は外部からはうかがい知ることができなかったが、この沈黙を破ってふたたび開封にスポットライトをあてたのが、ほかならぬ「対ユダヤ人キリスト教普及ロンドン協会」であった。

同協会の会員として早くから開封のユダヤ人社会に興味を持つにいたったイギリス人のフィン(James Finn)は、1843年『中国ユダヤ人(*The Jews in China*)』を出版したが、その前年、イギリスはアヘン戦争の結果、清国と南京条約を締結、香港の割譲に加え、上海など5港開港を清国に認めさせ、中国大陸への帝国主義的野望をあらわにしていたから、同書の刊行は絶妙なタイミングで、清国の門戸開放が音信の途絶えた開封のユダヤ人社会との交信を可能にするであろうとの期待を高め、西洋のキリスト教会はもとよりユダヤ人の間にも興奮を呼び起こすことになったのである<sup>10)</sup>。

「対ユダヤ人キリスト教普及ロンドン協会」は、1849年に香港教区の主教に任命されたジョージ・スミス(George Smith)に対して、開封ユダヤ人社会の調査を依頼し、スミス主教は1850年、51年の2回、2人の中国人キリスト教徒(プロテスタント)を開封に派遣した<sup>11)</sup>。2人の中国人は、上海から開封まで片道25日に及ぶ長旅の末、開封でユダヤ人社会の実情を調査した。シナゴグは建っていたが、建物は荒れるにまかせてあった。ユダヤ人社会の惨状は目を覆うばかりであった。彼らは貧困に打ちのめされており、シナゴグの改修の費用を捻出することはおろか、日常生活にも困窮しており、シナゴグの瓦や土台の煉瓦を売って糊口を凌がなければならぬほどであった。これらのユダヤ人のうち誰一人としてヘブライ語を理解できるものはおらず、ユダヤ人社会の運命は風前のともしびであった<sup>12)</sup>。上海に戻ったキリスト教徒は早速実情をつぶさに報告したが、翌51年再び開封に派遣された。今度は、ヘブライ語の写本など文献を購入するための資金を与えられ、さらに中国人のユダヤ教徒を連れてくるよう求

められた。こうして2度目の開封訪問で彼らは多くのヘブライ語写本を買  
い求め、2人のユダヤ人を伴って上海へ戻ったのである。

これらの調査の結果、19世紀末までに開封のユダヤ人社会については、  
いくつかの疑問とともに、興味深い事実もまた明らかになった。それまで、  
最大の疑問点とされていたのは、いったい、中国および開封のユダヤ人社  
会がいつごろ、どのようにして形成されてきたのか、というものであった。

この点に関しては、開封で発見され、イエズス会士たちによって紹介さ  
れたシナゴグ敷地内の石碑の4つの碑文(1489年、1512年、1663年、1679  
年)が解決の手がかりを与えてくれた。これらの碑文は、中国におけるユ  
ダヤ人社会の歴史を記述したもので、貴重な記録となっている。1489年の  
碑文は、1461年に黄河が溢れ、被害を受けたシナゴグが再建されたのを  
記念して建てられたもので、それによればユダヤ人の70家族が宋王朝の時  
代(960~1279年)に渡来し、皇帝の招請により、今日の開封に定着したこ  
とを記しているのに対して、その裏面に刻まれた1512年の碑文はユダヤ  
人の中国渡来を漢王朝時代(紀元前206~紀元220年)とし、また1663年  
の碑文によれば、その時期を周の時代(紀元前1122~256年)であるとし  
ており、さらに1679年の碑は漢王朝時代にユダヤ人が中国へ渡来したこ  
とを記録している<sup>13)</sup>。

このようにユダヤ人が中国に渡来した時期の特定に関しては、碑文の記  
述によって全く異なっており、いずれと判断すべきか決め手となる材料が  
他には存在しない。ドナルド・レスリー(Donald D. Leslie)は、証拠は  
少ないがと断ったうえで、ユダヤ人の中国渡来は1512年と1679年の石碑  
が記述しているように、漢王朝時代であろうと述べている<sup>14)</sup>。エルサレム  
がローマによって破壊され、ユダヤ人のディアスポラが始まるのが紀元70  
年であるから、これ以後さまよえるユダヤ人が中国まで到達した可能性は  
ある。ユダヤ商人たちが中国からローマまでのシルクロードの取引に従事  
していたのではないかと考えられている<sup>15)</sup>。

しかし、12世紀以前にユダヤ人が中国に渡ったことを証明する材料が他に見当たらない以上、漢王朝、周時代の渡來說をそのまま信じるわけにはいかないが、ユダヤ商人の活動が多く認められた広東などの中国沿岸地域とは異なり、内陸部の河南省に定着したのは、一般には宋王朝時代にユダヤ人がペルシャ、インドから海路広東へ、あるいはシルクロードを経て中国へ渡来し、当時北宋の首都として栄えた開封に定住するようになったとする説が有力とされる<sup>16)</sup>。北京の Yenching 大学で教鞭をとっていたロウエンザールは、12世紀に渡来し、開封に定着したユダヤ人の数はおよそ350から500人ぐらいで、18世紀に入っても人口は1,000人を越えることはなかったであろうと推定している<sup>17)</sup>。これらの碑文はユダヤ人が最初のシナゴークを1163年に建立したことを記している<sup>18)</sup>。このシナゴークは黄河の洪水などによる破壊を免れることはできず、開封のユダヤ人社会は最初は再建の努力を重ね、1279年に再建され、さらに1642年の黄河の堤防決壊で倒壊したシナゴークは再び建立され、1663年の碑文はこの完成を記念し建てられたのであった。しかし、その後次第に再建・修繕を行うだけの経済的余裕がなくなり、さらに施設を維持・管理する熱意をも欠くようになる。そうならばシナゴークは荒廃の一途をたどるしかない。

石碑はやがてカナダ英国教会の所有となって、開封にある教会の敷地内に移し替えられた<sup>19)</sup>。

1866年、北京にいたアメリカのプロテスタントの宣教師マーティン(W. A.P. Martin)が開封のユダヤ人社会の近況を探るため開封を訪れた。そこで彼は、シナゴークの建物がもはや存在せず、生活の必要に迫られて建物の材木や敷石などはすべて売り払われてしまったことを知って愕然とする。それだけではない。ユダヤ人社会の状況もまた、言葉に表せないほど惨憺たるものであった。ラビもいないことから、割礼や宗教儀式も久しく行われず、300~400人とみられたユダヤ教徒も共に神への信仰を捧げることもなく、イスラームなど他教徒との結婚に全く抵抗感がなくなっていた。

ユダヤ人社会が消滅するのも時間の問題であった。

### III. ユダヤ人の救済活動

開封のユダヤ人社会の存在が明らかにされると、西洋のキリスト教社会と同様、ユダヤ人社会も興奮に沸いた。西洋のキリスト教会がもっぱらこの地のユダヤ人をキリスト教に改宗させることに精力を注いだのに対し、ユダヤ人社会は彼らと早急に連絡をとり、滅びつつあるユダヤ人社会に活力を与え、それによって改宗を阻止しようとの熱意に燃えていた。

ユダヤ世界が開封のユダヤ人と接触を試みるのは、具体的には1850年、51年にプロテスタントの中国人が開封を訪れたときの日誌が公刊されたことが直接の契機となっている。キリスト教会の活動に刺激された大英帝国の主任ラビ、アドラー（Nathan Marcus Adler）は1853年頃、上海のサッスーン系銀行の頭取に対して開封ユダヤ人社会に関する情報を入手してほしいと依頼するとともに、開封にユダヤ教の学校を建設するためラビを派遣する案を示し、それに対する見解を求めた。しかし、彼らの反応は極めて鈍いものであった<sup>20)</sup>。

アメリカのユダヤ人社会もまた、開封のユダヤ人社会の窮状を聞いて心を痛めていた。アメリカではユダヤ教育に多大の功績を残した人物として著名なラビのアイザック・リーサー（Issac Leeser）が、彼らを救済するための寄付をアメリカのユダヤ人に呼びかけていた。「もうあまり時間は残っていない。もし、ここでアメリカのユダヤ人が奮起しなければ、アメリカのユダヤ人が屈辱だと感じるような方法で誰か他の者が彼らをどうかしてしまおうであろう。すでにキリスト教会は中国でこれらのユダヤ人を改宗させようと躍起になっている。」<sup>21)</sup>事実、キリスト教セブンス・デイ派の宣教師は安息日が同じだから改宗してもそんなに違和感はないとこれらの

ユダヤ人に接触を始めたことが紹介されている<sup>22)</sup>。リーサーらがこのようなキリスト教会の積極的な動きに神経をとがらせていたことは明らかであった。リーサーはアメリカのユダヤ人に対して金銭的支持を含めてもっと同胞の身の上を案じて救援活動に責任を果たすよう説得を続けるのであった。リーサーの呼びかけに応じて、ニューオーリンズをはじめいくつかのユダヤ人社会では基金を集め、開封に出かけて行ってユダヤ人をアメリカに連れてくるなどの計画が練られた。しかし、1861年に火ぶたが切られた南北戦争によってアメリカのユダヤ人社会はそれどころではなくなった。

1864年、あるユダヤ人の旅行者がイギリスを訪問し、旅費さえ工面してくれば、自分が開封へ行ってもよいと申し出た。そこで、ロンドンのユダヤ人社会はサッスーン・ダビド・サッスーン (Sassoon David Sassoon) を会長にし、モカタ (F.D. Mocatta)、ロスチャイルド (L.M. Rothschild)、ベディントン (Maurice Beddington) などを会員とする協会を設立し、そのユダヤ人を開封へ派遣するための費用を集めることになった。しかし、当のユダヤ人旅行者が風邪をこじらせ急死したため、計画は頓挫した<sup>23)</sup>。ラビ・アドラーは再度上海のサッスーンに書状を送り、こんどは開封のユダヤ人を上海に呼び寄せて初歩的なユダヤ教育を受けさせ、しかる後にヨーロッパやアメリカで高等教育を受けさせることにしたらどうか、と提案した。開封のユダヤ人社会がいまや消滅の途上にあるのは、つまるところ彼らがユダヤ教育を受けられなかったことに主な原因があるのだから、この教育を受けさせることによって同地のユダヤ人を救済しようという考えであった<sup>24)</sup>。この結果、2人のユダヤ人が開封から上海に連れて来られた。上海のユダヤ人社会が彼らの面倒を見たが、2人のユダヤ人はやがてホームシックにかかってしまい、ついに送り返さなければならなくなった。

一方、1867年3月、こんどは3人の開封のユダヤ人が、保有するトローラーのうちの3巻を携えて北京を訪れた。彼らの目的は明らかにトローラーを処分して換金することにあつた<sup>25)</sup>。北京で彼らと応接したプロテスタント

の牧師は失望を禁じえなかった。彼らはユダヤ教とキリスト教の区別がつかないほど無知であったが、それよりも許せなかったのは彼らのうち2人がアヘンの常用者であったことである<sup>26)</sup>。しかし、3人のユダヤ人の北京訪問は同地のキリスト教会に牧師を開封に派遣し、状況を詳しく把握する必要を痛感させた。同年、3人と面識のある牧師が怪しまれないように中国服に身を包み、額を剃って中国人に変装し、開封に出発した。しかし彼の報告もまた、悲観的なものであった。やはり1867年ユダヤ人の商人のリーバーマン(J.L. Liebermann)が商用のため中国を訪れ、開封にも足を延ばした。そこで、彼はユダヤ人から開封のユダヤ人人口は400家族ほどで、200家族が北京に移動してしまい、確実に衰退の途上にあることを知らされるとともに、シナゴグはもはや存在せず、その跡地はゴミやガレキが小山のように集積し、窪地には泥水がたまり、近寄ることもできぬほどのひどさであることなどを目撃している<sup>27)</sup>。

1899年12月28日、「対中国人キリスト教知識普及協会(The Society for the Diffusion of Christian and General Knowledge among the Chinese)」の宣教師ティモシー・リチャード(Timothy Richard)が上海のユダヤ商人にあてた書簡のなかで、開封のイエズス会が同地のユダヤ人社会の所有していた最後のトーラーの巻物入手し、上海のイエズス会のもとに送ったことを伝えた<sup>28)</sup>。早速上海ユダヤ人社会のメンバーが同教会に急行し、トーラーを検分した<sup>29)</sup>。

上海のユダヤ人社会は衝撃を隠さなかった。数百年にわたって開封のユダヤ人が守ってきたトーラーが異教徒の手に移ったのである。歴史が浅いとはいえ、上海ユダヤ人社会のプライドと良心が傷つけられたのである。開封ユダヤ人社会が消滅寸前の状態にあったことはつとに知られていた事実である。効果的な行動を起こすことができなかったことは、結局、彼らが開封ユダヤ人社会の状況に無関心であったことの言い訳にしか他ならなかったといえる。いずれにせよ、この一件は開封ユダヤ人社会に救済の手

を差しのべることが急務であり、当然のことながらその責任はあげて当時、中国で最大の規模を誇っていた上海ユダヤ人社会の負うところとなった。1900年3月、上海ユダヤ人社会の代表46人は、開封ユダヤ人社会がいま一度信仰に復帰することを求め、そのためには上海ユダヤ人社会がシナゴークの再建を含む財政的援助を果たす用意があり、開封のユダヤ人社会のため何が可能かを相談できる人物を上海に派遣してほしいとしたための書状を開封に送ったのである<sup>30)</sup>。

#### IV. 中国ユダヤ人救済協会

1900年5月14日、中国ユダヤ人救済協会(The Society for the Rescue of the Chinese Jews: SRCJ)が上海で設立された。会長には、バーミンガム生まれのユダヤ人で、ルイス・ムーア商会を経営するルイス・ムーア(Lewis Moore)、副会長にはサー・ビクター・サッスーン(Sir Victor Sassoon)の伯父のシモン・レヴィ(Simon A. Levy)が、それに名誉会計主任にエドワード・エズラ(Edward I. Ezra)、名誉書記にはソロモン(S. J. Solomon)がそれぞれ就任した<sup>31)</sup>。SRCJの門戸は全世界のユダヤ人にも開放されており、その目的は以下のように規定された。

「中国におけるユダヤ人居留地の起源、その後の発展および歴史を研究すること、現存する遺跡、記念碑を保存すること、必要な場合には記念碑を建立すること、ユダヤ民族の血を受け継ぐ中国のユダヤ人をユダヤ教に復帰させること。」<sup>32)</sup>

直ちに開封ユダヤ人社会との接触が開始され、1900年8月ヘブライ語と中国語でしたためられた書状が開封に送られ、10月終わりにいたって中国

語で書かれた返書が上海に届けられた<sup>33)</sup>。開封ユダヤ人社会の存在を確信した上海のユダヤ人社会は早速代表の派遣を要請した。この結果、1901年4月6日、開封のユダヤ人父子が上海を訪れ、さらに翌1902年3月10日、この父子を含め8人のユダヤ人が開封から上海に到着し、ユダヤ人社会の暖かい歓迎を受けた<sup>34)</sup>。

しかし、これらのユダヤ人がもたらした情報は上海のユダヤ人を意気消沈させた。彼らと直接面談したエドワード・エズラは、「彼らはもはやユダヤ教の儀式を遵守せず、太平天国の乱や黄河の氾濫によって開封のユダヤ人社会は四散してしまい、人口はわずかに140人を数えるのみ……」と報告している<sup>35)</sup>。これらのユダヤ人がかろうじてユダヤ人としてのアイデンティティを保持しているとすれば、それはただ2つ、彼らが豚肉を決して食べないこと、偶像を崇拜しないことで、それだけが他の中国人とユダヤ人とを決定的に分かつことになっていたのである<sup>36)</sup>。

こうした状況に直面した SRCJ は、どのように対処するのが賢明かを改めて協議することになった。衆目の一致するところは、元の場所にシナゴークをもう一度再建し、消滅しつつある開封ユダヤ人社会の精神的センターとしよう、というものであった<sup>37)</sup>。そこで、SRCJ は、シナゴークの再建とそれに必要な教師の派遣を決定したが、このために要する費用だけで5,000ポンドに達することが明らかとなった<sup>38)</sup>。SRCJ の財政能力ではとてもこの費用を賄うことはできないため、世界のユダヤ人に献金を呼びかけることになったが、この呼びかけに応じたのはほとんどが極東在住のユダヤ人ばかりで、9ヵ月たってもわずか100ポンドしか集まらなかった<sup>39)</sup>。期待された欧米などのユダヤ人社会の反応は冷やかであった。イギリスのユダヤ人社会の主任ラビは、ロシアやルーマニアから多くのユダヤ難民が迫害を逃れて次々とイギリスに上陸し、社会問題を惹起しており、これの対策に追われ、とても海外まで手が回らないと丁重な断り状を書いて寄越した<sup>40)</sup>。期待していた財政的支援が一向に進まないことが明らかになる

と、開封からはるばるやって来たユダヤ人の間に失望が高まり、ついに1902年6月にいたり、彼らのうち身寄りがいないために残留を希望していた父子2人を除く6人はホームシックを理由に故郷へ帰ってしまう<sup>41)</sup>。これを機にSRCJメンバーの熱意は急速に衰え、1902年7月にSRCJの第3回会合が2年ぶりに開催されたときには出席者は少なく、会長を慨嘆させた<sup>42)</sup>。

SRCJの第4回会合は1903年11月に開かれ、ふたたび開封へユダヤ人を派遣することの是非が討議され、また上海から戻った開封のユダヤ人に対して就業の機会を提供することが決定された<sup>43)</sup>。その後、SRCJは1904年2月および3月に会合したのを最後に長い冬眠状態に入り、次に開催されるのは20年を経てからである<sup>44)</sup>。

上海ユダヤ人の活動がこれほど長期にわたって休業状態に追い込まれたのはなぜであろうか。上海ユダヤ人社会の機関誌『イスラエルズ・メッセンジャー (*Israel's Messenger*)』は1906年10月19日号でその理由を次のように述べている。すなわち、上海のユダヤ人の間にSRCJへの関心がなくなったこと、SRCJの活動のコストが負担となり、数百ドルの赤字を出したこと、である<sup>45)</sup>。

その20年後の1924年7月に上海のユダヤ人はふたたび会合し、SRCJを再興するために暫定委員会を設置することで合意をみた。SRCJは翌8月復活し、会長には1903年に死亡したムーアにかわって副会長であったシモン・レヴィが就任、副会長ローゼンバーグ (A. Rosenberg)、会計担当ロブゾフスキー (Lobzowsky)、書記ホイン (A. Hoine) の顔触れが新しい執行部に就き、ソコルスキー (George Sokolsky) を議長とする執行委員会が設立された<sup>46)</sup>。

再建されたSRCJは、早速、新疆 (Sinkiang) 出身のユダヤ人ウォン (Wong David Levy) を代表として開封に派遣し、ユダヤ人たちの実態を調査させた。ウォンの報告は絶望的であった。開封に残るユダヤ人はさら

に減って 99 人となり、大半は貧困に喘いでいたという<sup>47)</sup>。

1937 年(昭和 12 年) 7 月 7 日のいわゆる蘆溝橋事件をきっかけに開始した日中両軍の衝突は全面的戦争に発展した。日本側はこれを機会に中国の抗日運動に打撃を与えるべく戦争の拡大方針に踏み切った。同時に、漢口や上海など華中에서도排日の気運が高まり、戦火は華北から華中へと中国各地に次々と拡大していった。38 年に入ると、華北、華中に連結し、かつ大量集結している中国軍の主力を包囲・壊滅して盛り上がる抗日運動に打撃を与えるための除州作戦が発動され、6 月開封は北支那方面軍(司令官寺内壽一大将)の第 1 軍(司令官香月清司中将)麾下の第 14 師団(師団長土肥原賢二中将)の占領するところとなった<sup>48)</sup>。日本軍は 45 年の敗戦までのおよそ 7 年間開封を占領したが、日本軍占領下の開封のユダヤ人社会の様子は外部にほとんど伝わっていない。わずかに、1940 年、日本人が占領下の開封を訪れ、極めて簡単な現状報告が雑誌に掲載されたにすぎない。その報告によれば、開封を中心とするユダヤ人の総数は 100 人内外とされている<sup>49)</sup>。

## V. ユダヤ人たちはどこへ消えたのか

第 2 次世界大戦後、そして新中国の誕生以来、開封のユダヤ人社会がどうなったか、その消息はほとんど外部の世界に明らかにされていない。開封のユダヤ人と会見した、といったニュースが断片的に流れることはあったが、もはやそのこと自体に大きな意味はなかった。ユダヤ人と名乗りをあげた人物も、引き続き宗教的伝統を維持していると語ってはいるものの、もはやひとつの化石にしかすぎず、やがて開封のユダヤ人は歴史の彼方に埋没してしまうのである。

それでは開封のユダヤ人社会はなぜ歴史の彼方に消失してしまったので

あろうか。

まず、最初に考えられるのは、開封ユダヤ人社会が長い間、外界から途絶され、とくに最後のラビが死亡してからは、宗教的行事を行うこともできないほどになったため、ユダヤ人社会自体が次第に活力を喪失していったことである。内陸にあって北京、上海や、沿岸都市との交通も不便であったことはユダヤ人社会の閉塞性を倍加することになった。北京、上海から開封までの道のりは、水陸路を利用して片道20~25日ほどの距離にある。滞在日数を入れると一度の開封旅行に最低2ヵ月を要する。しかも内陸部の治安は劣悪で、追いはぎ、盗賊から身をどうやって守るかに神経を集中しなければならなかった。開封を訪問したイエズス会士は中国人に変装したうえ、拳銃を肌身放さず携行しなければならないほど、道中は命がけであった。

ついで、上海を含めた世界のユダヤ人の開封に対する関心の欠如を指摘することができよう。この点はイエズス会をはじめとするキリスト教会の熱心な布教活動とは対照的であった。だが、この点でユダヤ人社会の対応を責めるのはいささか酷であろう。とくに19世紀末にロシアの農村一帯でポグロム（ユダヤ人に対する暴力）が荒れ狂い、多くのユダヤ人が家を捨て、流浪の末にイギリスなどに避難を求めており、これらの地域のユダヤ人社会はその対応に追われていたから、中国まで手が回らなかったという事情は斟酌しなければなるまい。

さらに、黄河の氾濫、太平天国、義和団事変など、自然災害や戦乱のため、シナゴグなどに被害が及び、そうでなくとも財政的に困窮していた開封のユダヤ人は回復不可能なほどの損失を被り、一部には北京などに移転する者が続出した。

4番目の理由に、中国の独特の風土・文化をあげることができる。儒教思想は少数者に寛大であった。また儒教の説く倫理・道徳などはユダヤ人に不都合をもたらすどころか、彼らの意識にむしろ合致することになっ

た。要するに異教徒との差異を除去してしまい、かえってユダヤ人の同化を促すことになっていく<sup>50)</sup>。ヨーロッパのユダヤ人社会は差別、迫害に苦しんだが、結果的に差別や迫害などの存在がキリスト教社会に居住するユダヤ人を厳しい緊張状態に置き、そのため彼らの宗教的・民族的意識を高揚、ユダヤ人どうし互いの結束をむしろ高める方向に作用したのである。ところが、中国には、そのような差別や緊張が目立つほどには存在しなかったし、むしろ包容力があつたから、あえてユダヤ人だけの殻に閉じ籠もる必要はなかつた。また、外に向かつてユダヤ人意識を絶えずみなぎらせている必要もなかつたのである。したがって、この点でもユダヤ人の同化を防止する手段はなかつたといえよう。ユダヤ人のなかで優秀な者は北京に出て仕官することも可能であり、こうしてコミュニティの枠組みから離れてしまうと、彼らは同胞と接触することもほとんどないまま、二度とユダヤ主義に戻ることはなかつた。残つたユダヤ人たちもまた、周囲のイスラーム教に改宗したり、イスラーム教徒と結婚するなどして、次第にユダヤ主義から離れていったのである。

こうして、開封ユダヤ人社会は中国社会の大海に飲みこまれてしまった、ということができよう。

## 注

- 1) 開封のユダヤ人社会については、次のような文献がある。

William C. White, *Chinese Jews*, 2nd edition, New York, Paragon Book, 1966; Hyman Kublin (ed.), *Studies of the Chinese Jews*, New York, Paragon Book, 1971; *Chinese Jews*, Shanghai, The China Press, 1926; Hyman Kublin (ed.), *Jews in Old China*, New York, Paragon Book, 1971; R. Lowenthal, "The Jews in China: An Annotated Bibliography," *Chinese Social and Political Science Review*, XXIV (1940); Michael Pollak, *Mandarins, Jews, and Missionaries: The Jewish Experience in the Chinese Empire*, Philadelphia, The Jewish Publication

Society of America, 1980; Paul Pelliot, "Le Juif Ngai, Informateur du P. Mathieu Ricci," *T'oung Pao*, 2nd series, XX (1921), reprinted in Hyman Kublin (ed.), *Studies of the Chinese Jew*; Sidney Mendelssohn, *The Jews of Asia*, London, Kegan Paul, 1920, (reprinted by AMS Press, New York), pp. 133-163; Donald D. Leslie, *The Survival of the Chinese Jews*, Leiden, E.J. Brill, 1972; Song Nai Rhee, "Jewish Assimilation: The Case of Chinese Jews," *Comparative Studies in Society and History*, 15 (1973); 杉田六一『東アジアへ来たユダヤ人』音羽書房、昭和42年、13-37頁。

近年、中国ユダヤ人社会への関心が国際的に高まりつつある。アメリカには中国・ユダヤ研究所 (The Sino-Judaic Institute) が設立され、多彩な活動を行っている。また、中国でも学者の関心は高く、潘光旦『中国境内猶太人の若干歴史問題——開封的中国猶太人——』(北京、1988年)、張綏『猶太教与中国開封猶太人』(上海、1990年)などがこれまでに刊行されている。

- 2) 老人の北京訪問の主な目的について議論がある。リッチによれば老人は博士の試験を受けるため北京へ来たとされるが、ペリオットは、学校に職を求めためであったと論じている。Pelliot, *op. cit.*
- 3) Pollak, *op. cit.*, p. 8.
- 4) *Ibid.*, p. 10.
- 5) Lowenthal, *op. cit.*
- 6) White, *op. cit.*, pp. 26-27.
- 7) ゴザニ神父の書状は、White, part I に収録されている。
- 8) P.G. Brotier, "The Memoir of Gabriel Brotier," *Lettres Edifiantes et Curieuses*, vol. XXIV, 1781, reprinted in White, *op. cit.*
- 9) Pollak, *op. cit.*, p. 148.
- 10) J. Finn, *The Jews in China: Their Synagogue, their Scriptures, their History*, reprinted in Kublin (ed.), *Jews in Old China*, 1971. なお、フィン は 1846 年から 62 年まで英領事としてエルサレムに滞在したが、同地においても開封のユダヤ人社会の消息に関心を持ち続けた。Pollak, *op. cit.*, pp. 136-37.
- 11) White, *op. cit.*, pp. 16-17.
- 12) Lawrence Kramer, "The Ka'ifeng Jews: A Disappearing Community," in Kublin (ed.), *Studies of the Chinese Jews*.
- 13) Lowenthal, *op. cit.*, pp. 115-116; Finn, *op. cit.*; Kramer, *op. cit.* なお、これらの

- 石碑は、1910年カナダの英国教会が開封に開設された際、同教会敷地内に移転された。D.A. Brown, "Through the Eyes of an American Jew," *The American Hebrew and Jewish Tribune*, January to March 1933, reprinted in White, *op. cit.*
- 14) D.D. Leslie, "The Kaifeng Jewish Community: A Summary," in Kublin, *op. cit.*
  - 15) *Ibid.*
  - 16) Lowenthal, *op. cit.*; Kramer, *op. cit.*
  - 17) Lowenthal, *op. cit.*
  - 18) White, *op. cit.*, part II, pp. 11, 43, 62, 97.
  - 19) これらの石碑のうち、1633年の碑文については行方が知れない。残りの1489年、1512年および1679年の碑文は、1957年まではかつてのカナダ英国教会の敷地にあるのが確認されている。しかし、その後この辺りには労働者のアパートが建設されたため、現在どのような状況にあるかは不明。Pollak, *op. cit.*, p. 76 and Notes 26, p. 377.
  - 20) Pollak, *op. cit.*, p. 176.
  - 21) *Ibid.*, pp. 176-177.
  - 22) *Ibid.*
  - 23) M.N. Adler, *Chinese Jews*, 1900, reprinted in Kublin (ed.), *Jews in Old China*, p. 112.
  - 24) Pollak, *op. cit.*, p. 186.
  - 25) *Ibid.*, pp. 186-187.
  - 26) *Ibid.*
  - 27) *Ibid.*, pp. 191-195.
  - 28) E.I. Ezra, with a preface by Arthur Sopher, *Chinese Jews*, p. 38.
  - 29) Pollak, *op. cit.*, p. 207.
  - 30) *Ibid.*, p. 210.
  - 31) Brown, *op. cit.*
  - 32) Ezra, *op. cit.*, p. 76.
  - 33) Walter Fuchs, "The Chinese Jews of K'ai-feng Fu," (Excerpts from an article in *T'ien Hsia Monthly*, vol. V, August 1937), reprinted in White (ed.), *Chinese Jews*, p. 165.

- 34) *Ezra, op. cit.*, p. 40.
- 35) *Ibid.*, p. 42.
- 36) Fuchs, *op. cit.*, p. 166.
- 37) *Ibid.*, p. 167.
- 38) *Ibid.*, p. 168.
- 39) *New York Times*, 1903. 5. 3.
- 40) Fuchs, *op. cit.*, p. 168.
- 41) *Ibid.* ユダヤ人の父子だけが親類もいないという理由で上海にとどまった。父は子にユダヤ教育を受けさせた。数年後父が死ぬと、息子は上海のユダヤ人経営の会社に就職したが、ユダヤ教には全く関心を示さなかったという。
- 42) Brown, *op. cit.*, p. 155.
- 43) *Ibid.*
- 44) *Ibid.*
- 45) *Israel's Messenger*, October 19, 1906.
- 46) Brown, *op. cit.*, p. 156.
- 47) *Ezra, op. cit.*, pp. 65-66.
- 48) 防衛庁防衛研修所戦史室編『支那事変陸軍作戦〈2〉昭和14年9月まで』朝雲新聞社、昭和51年。
- 49) 三上諦聴「開封猶太教徒の現状報告」『支那仏教史学』5, No. 1, 1941年6月25日。一方同じ頃、開封を訪れた曾我部静雄東北帝大教授によれば、開封のユダヤ人人口は約180人程度で、しかもそのうち100人程は上海などの大都会に出て商業に従事し、開封に残るのは約80人程であった。曾我部静雄「開封の猶太人」『外交時報』、1941年2月15日。
- 50) クレーマーは、儒教思想がユダヤ人をその包容力ですっぽりと包み込んでしまったとみる。Kramer, *op. cit.* また、パールマンは、ユダヤ教に源を発するキリスト教、イスラーム教両社会のユダヤ人は強い選民意識をみなぎらせていたが、この意識は、しかし、中国には全く通用しなかったという。Perlman, *op. cit.*, p. 202.

## The Jewish Community in Kaifeng

*by* Naoki MARUYAMA

The Jewish Community in Kaifeng, the capital city of Honan Province in China, was first recorded in a letter dispatched to the Vatican by Matteo Ricci, a Jesuit missionary at Beijing in 1605. The stone inscriptions which remain there tell us that this “orphan colony” was established during the Sung dynasty between the tenth and twelfth centuries. Kaifeng was a terminal point on the Silk Road which passed through the Middle East to Europe. This discovery stirred up curiosity and excitement both in the Christian and Jewish communities in Europe.

As a result of several contacts with the Jews in Kaifeng, it became clear that the Kaifeng Jewish community, with a dwindling population, isolated from the main centre of Judaism, nevertheless preserved its Jewish identity and conducted some religious rituals.

Meanwhile, the Jewish communities in Britain were alarmed at the dying Jewish community in Kaifeng, requesting the local Jewish community in Shanghai to rescue their co-religionists. The American Jewish community started a fundraising campaign to send their missions there and take some of the members of the Kaifeng community to America. In 1900 the Shanghai Jewish community decided to

contact the Jews of Kaifeng and established the Society for the Rescue of the Chinese Jews. All the attempts, however, ended in failure. Finally the Jewish community ceased to exist.

How did these Jews disappear ?

After the death of the last rabbi, the community was left with no leader who could conduct religious ceremonies. The sabbath was not observed. Frequent floods of the Yellow River destroyed the synagogue and distressed the people. Members of the community moved to Beijing or intermarried with the Muslims in the neighborhood. Further, Confucianism as a way of life appealed to the Jews. Thus it is safe to say that the Kaifeng Jewish community was absorbed into the Chinese society rather than disappeared.